

6月12日（木）

おはようございます。今日は、少し密教の話をしてします。

密教では、大きな楽と書いて「たいらく」ということが大切だと説いています。その大楽というのは何かというと、要するにうれしい気持ちのことです。物事をするときに喜んでやらないといけないということです。だから修行も苦節三十年みたいな修行はよくないというわけです。喜んでなくていけないと。つまり、物事をやるときに喜んでやる、その喜びのことを大楽と言う。大いなる楽しみ。それでないとうまくいかないものだとね。

ところで、清風学園のカウンセラーの神野先生が、よく、命が喜んでるということ言うてはる。「何でも喜んでやらなあかん」、「勉強も喜んでやらなあかん」、「喜んで勉強好きだ」というお話をされるのです。私も「ほんとうにそやな」、「大楽」と共通項があるなと思います。やっぱり、チャレンジして学ぶことがたくさんあるものです。諸君らは若いんですし、失敗して許されるのは諸君らの年代なのです。年取ってきたらだんだん、失敗したら簡単には許されません。しかし若いときは失敗しても許されるんです。なおかつ失敗して学ぶことも必ずあるものですし。まあそういう意味です、やっぱり喜んでチャレンジしていくのがいい。ものが好きやと思ってですね、そういう気持ちが大切です。

そこで、密教では、それがものになるかどうか、悟るかどうかのポイントは、その「大楽」があるかどうかだと言うのです。要するに修行をやってもですね、しんどいしんどいと思って修行していたらよくないというわけです。喜んでやるのがいいのだと。喜んでやるかどうかというのが、その修行がものになるかどうかの分岐点になる。だから勉強もクラブ活動も日常生活もそうですが、いろいろなものに興味があって、「もう楽しいて楽しいてしゃあない」というのであれば、基本的にうまくいくわけです。諸君らも、自分の可能性を自分で狭めてしまわない、自分の可能性をこの程度だと思ってしまわないことが大切なんです。

昨日、ロジャー・バニスターの話をしてしました。人間は、自分の能力はこの程度だと思ってるからそれを越えられないという話。自分で作ったその固定観念を超えていかないとはいけません。でも、固定観念を超える原動力は、知的興味、そのことを求める気持ち、そのことを求める喜び、そういうことが、その自分の限界とか、自分の想定していることを越えていく大きな要因になるのだと思います。ですから、喜んでやれるように自分の心

をそっちへもっていかないといけない。神野先生は、「命喜んでる、ほっといても命喜んでる」というような話をされて、僕もようお話を聞いてですね、なるほどそういうふうに思えるようにならないといけないなと思ったのです。喜びをもって物事に臨めるかどうかが大変だと先生は言われました。

これは、まあ僕らも年取って、少しは上の立場になりましたけども、大学時代の同窓生の話ですが、商社に勤めた人で、今ではその商社の役員になっていますが、若い時に、たとえば「インドへ行かなあかん」とか、「ベトナムへ行かなあかん」ということになったら、「もうかなわんな」と言ったり、また「どうしよう」と言う。けれども当たってしまい、やらなくてはならないということが決まったらですね、もうその仕事をやることでどれだけの自分の喜びにしようかと、どれだけのその仕事を喜びに変えていこうか、また発見しようかというふうに心を決める。そのように切りかえられる人間が、やっぱりトップビジネスマンになっていくのだと思います。諸君らも、いやいややるのでなくて、もうやらないわけにいかなくて、どうせやらなくてはならないのだったら、喜んでやれるように自分の気持ちを上手に、自分のモチベーションをそういうふうにもっていきようにするのがいいです。若いことからチャレンジして損なんかひとつもありません。学ぶことしかないんです。チャレンジしたらですね、そのチャレンジはどんなチャレンジであっても、たとえ失敗であっても、諸君の血となり肉となって必ず帰ってきます。そういう意味でも積極的にいろんなものにチャレンジしていく、喜びの気持ちをもって臨むというふうに、上手に自分の気持ちを磨いて欲しい。希望のなかに幸福を見いだすというのはそういう考え方です。絶望せんと希望をもって頑張っていこうという話ですからね。上手に自分の心のなかに、やることに対して喜んでやれるように、上手に切りかえる。そのように自分で持って行って欲しいと思います。今朝の朝礼はこれで終わります。

(学校長)